

地域自然回復のために

## NPO 法人 森林再生支援センターニュース

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 理事長 村田 源  
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5  
TEL 075-432-0026 FAX 075-432-0026  
URL: <http://www.crrn.net> E-mail: [info@crrn.net](mailto:info@crrn.net)

### ～在来種・郷土種という考え方から地域性種苗という考え方へ～

「自然再生に適用すべき地域性苗木の諸問題」は3回に分けてお届けしています。

第1回：はじめに（問題点の所在）……ニュースレターNo.12に掲載

第2回：実務（苗木生産上の問題）……ニュースレターNo.13に掲載

第3回：結論（今後の課題と展望）……本紙

### 自然再生に適用すべき地域性苗木の諸問題（第3回）

森林再生支援センター専門委員  
高田研一（高田森林緑地研究所）

#### 5. 地域性苗木の生産

##### 5-1. 種子の確保と地域性苗木の生産

大部分の苗木生産者にとって遺伝的系統に留意された地域性種子の入手はこれまで経験のなかったものである。種子供給業者は、種が同じであるという基準を満たせば、利益率を上げるために、より安価に入手できる種子をどこから選んできて良かったが、地域性苗木生産のためには、その基準だけでは不十分となる。このため、採取を行った母樹の明らかな自生地記録が添付された種子の全国各地からの供給が可能となる体制整備が急がれている。地域性苗木生産者の任意生産者団体である自然回復植物協会（事務局：久留米市）では、生産者自らの手による種子採取会をすでに行ない、各地の森林組合などを通じた種子

の共同購入を実施しようとしている。

このようにして得られた出所の明らかな地域性苗木は、平成18年度には市場に供給されると思われるが、それ以前の段階でも植木協会コンテナ部会に所属する生産者を中心に府県単位で生産地が明示された苗木を供給可能である。

##### 5-2. 育成樹種の選択

自然再生を目的とする生物多様性の高い環境緑化においては、目標群落の設定があらかじめ行われる。このとき、導入される緑化植物の構成は、植生遷移のプロセスを反映する目標群落の設定に応じていくつかのタイプに分かれることがありえる。ただし、現状で市場購入可能な地域性苗木は200種に届かず、委託生産を実現しなければ、

この中から選択せざるを得ない制約がある。

植生遷移初期相の樹林化；草本・低木組み合わせタイプ

比較的早期に完成させることを目的とした目標群落で、10年程度以内で樹木は成木に達する。ウツギ、タニウツギ、グミ類、ハギ類などの低木が用いられる。のり面保護工としての樹林化の面が大きい。特にハギ類を多用すると、自然再生が大きく遅れる場合がある。国立公園域など、周辺部に自然環境がよく残り、自然侵入によって植生遷移が順調に多様化に向かう場合に適用される。

植生遷移初期相の樹林化；高木中心タイプ

ヤシャブシ、ケヤマハンノキなどの先駆性高木による単相林は、播種工による造成が容易である。この場合、目標群落は20年程度で一応の完成をみるが、林冠高が揃いすぎる傾向があり、この目標群落に引き続く植生遷移は林冠が崩壊する40年程度以上を待たなければならない。周辺部の自然環境がよく残っている場合には、地域固有の自然植生へと向かう植生遷移が期待できるが、その速度はやや緩慢であることが予想される。ネムノキ、ヤマウルシ、ハゼ、アカメガシワなどの先駆種を組み合わせた植栽は、常緑広葉樹林帯の低山域などで適用される場合があるが、低山域では、人為的影響により、地域の潜在自然植生を構成する植物相がすでに失われている場合が多く、特定の自然侵入種のみによる退行遷移に進む恐れがある。

植生遷移中期相の樹林化；高木中心タイプ

到達樹齢が100年前後に達するヤマザクラなどのバラ科、コナラ、クヌギ、アラカシなどのブナ科やニレ科、ヤナギ科などの強光利用型の高木を導入するケースでは、比較的長期にわたり、緑化導入された植生が景観を作り上げる。このとき、単一種の優占度が高くなりすぎると、病虫害などによって短期的に植生の崩壊が生じる恐れが生まれる。また、立地の影響がより強く出てくるので、緑化目標への到達成績にばらつきが生まれやすい。さらに、低木層の自然侵入が緑化高木の位置関係がもたらす植生構造や周辺自然環境の状

態によっては期待できない場合がある。

このような群落が地域及び立地固有の植生遷移；潜在自然植生へと進むためには、種子飛来が可能な周辺域に遷移後期種のストックが存在することが重要である。

植生遷移中期相の樹林化；高・中・低木組み合わせタイプ

人為的かく乱を受け続けてきた植生である里山の現況の多くは、植生遷移中期を構成する種が優占している。このような里山の植生を復元することを緑化目標とする場合には、先駆種に加えて遷移中期相に相当する高・中・低木種苗木を緑化に適用する。しかし、里山の植生自体は人の管理下においてのみ成立してきた群落であることから、放置が前提となる立地では、これに続く遷移後期相のストックが周辺地域に存在するかどうかを考慮しておく必要がある。

なお、低木層を形成する樹種を強光条件下にある緑化時に導入するためには、先駆種を加えるか、巢植えによる密植か、ないしは空間配置（配植）上の樹種組み合わせに十分配慮し、過剰光を抑制することが求められる。

植生遷移後期相の樹林化；高木中心タイプ

潜在自然植生となる群落を目標とする場合、技術的、コスト的制約等から、その群落の林冠を占める高木性樹種苗木を中心に導入を行うケースで、かつ自然環境が比較的豊かで、遷移後期に出現可能な中低木樹種のストックが周辺地域に存在する場合が該当する。遷移後期種高木樹種の選択は、微地形や土質の影響を受ける場合が多いため、立地ポテンシャル評価に応じて行う。一般には、周辺地域の同様な立地における天然林での高木構成種を選択するが、樹冠面積が大きくなるものがふつうであり、緑化に用いる樹種は補全木となる先駆性樹種を加えても、それほど多くなならない。また、この高木苗木を一様な空間分布で配植すると、林地回復基準並みの植栽本数でも林冠高が揃いすぎ、生物多様性にとって不可欠な森林の複層性が確保できない場合が生まれる。その配置により、将来の樹冠成立位置の予測を行い、群落

内の光分布が遷移後期中低木、林冠の後継木の自然侵入を妨げないように工夫することが必要である。活着は、密植ないしは先駆性樹種苗木の組み合わせにより受光を抑制することが必要となる。

植生遷移後期相の樹林化；高・中・低木組み合わせタイプ

潜在自然植生の考え方はきわめて重要で、これを構成する地域性種苗の緑化への適用が植生遷移後期相の樹林化を意味すると考えてもよい。しかしながら、前項に掲げたように緑化現場のポテンシャル評価、予測が難しく、多くの樹種苗木の導入は困難な点が多い。つまり、理想的にはこのタイプの植生遷移後期相のさまざまな樹種を含む植栽工が樹林化としてもっとも望ましいケースが多いが、このとき、立地のポテンシャルを読むとともに、先駆種や遷移中期種を後期種の育成を考慮しながら、巧みに配植する高度な技術が要求される。自然配植として、その技術の深化が現在、各地の専門家の手によって進められている。

### 5 - 3 . 苗木生産者の動き

地域遺伝子資源保全についての認識が広まるとともに、遺伝的系統に配慮した地域性苗木の供給体制を図ろうという生産者の動きは近年活発化してきている。

生産者の共通認識は大枠として次のように整理できる。

）苗木の遺伝的系統について

樹種別の移入・移出許容範囲が明確化していない現段階では、経過措置として、環境省の全国植生ブロック区分や氷期における植物の地理的隔離と後氷期の植物移動ルート の推定などに基づいて、改めてブロック区分を行い、このブロック内で苗木を限定的に動かし得るものとする。このブロック区分と経過措置期間などについては、研究者、関係行政機関、生産者等の専門家会議で検討を進めることが必要となろう。

この会議では、樹種別の情報が順次確定していき次第、種ごとの移動許容範囲を定め、順次、ブ

ロック区分内移動と置き換えていくことが望ましい。

）生産樹種の拡大とそのリスクについて

わが国の自生種苗木として、従前 200 種程度の種が生産されてきたが、全国各地域の潜在自然植生を地域生態系として再生していくための樹種ストックとして、平成 25 年までに、500 種程度の生産は行いたい。このとき、適用頻度の低い種や生産コストがかかり過ぎる種については、生産リスクが大きくなるため、これを補償できる仕組みの検討が必要である。

）生産技術について

大部分の種についての苗木生産技術はすでに整っている。コンテナ容器の品質、形状、苗木規格の変更に対しては、そのリスク回避ができれば、対応はできる。

）種子の確保について

種子の確保は、個別の生産者の自力確保、各地の森林組合等からの共同購入、苗木の個別委託生産事業内での種子採取などの方法で確保が可能である。

）生産地について

従前の全国の苗木生産地に分散した生産者には、各地域の種子を用いて、分別育成できる体制がある。地域性苗木は、種子の出所の明確化によって対応できることを改めて明確化しておく必要がある。

）供給体制について

将来的には苗木使用数の多い大規模な緑化現場に対しては、委託生産などの計画生産のシステムの導入が不可欠である。どの現場にどの樹種がどの程度の本数必要かという事前情報が、生産者に伝わる仕組みを早急に整備すべきである。こういった情報の受け皿となるには、公的機関ないしは公益的機能を有する生産者組織であることが求められるであろう。多くの生産者は、この観点から、受け皿としての自然回復植物協会に期待を寄せている。

）価格について

種子の確保に対するコスト、休眠打破などの生

産上のコスト、分別生産による圃場経費、コンテナ容器の変更、苗木仕様の変更などを考慮すると、平均して3倍程度の苗木価格増になることが試算される。

以上のような共通認識に立って、地域性苗木生産に携わってきた、ないしは新たに携わろうとする生産者数百名が、自然回復植物協会の下に集まりつつあるのが現状である。日本植木協会でも相互に連携協力しながら進もうとしており、5年程度後には緑化現場での要請に十分対応できる体制が整うものとみられる。

## 6. 地域性苗木適用上の問題

### 6-1. 計画者の力量

一般に生物多様性の高い地域固有の生態系を形成する植生構成種は、先駆性群落と比較して構成種数が多く、かつ立地条件や群落内光環境に対応したすみ分けの傾向が著しくなる。したがって、遷移後期種を含む緑化を試みようとした場合、立地評価能力と苗木生長予測、樹冠発達予測等に基づいた群落内光環境評価能力が必要となり、その上で樹種選択が行われるべきである。

したがって、単に地域の豊かな森林を構成する樹種と同じものを並べた設計程度では、樹林化が順調に進捗するとはいえないケースも多くなる。実際、数百種にも及ぶ地域生態系の主構成要素となる樹種についてのその生育特性をはじめとした生態的特性を把握した上で、緑化設計できるような計画者は現状ではほとんど存在せず、そのため、樹種選択に当たっては、地域、地方の専門家が携わっていくこととなろう。地域にこういった専門的能力をもった設計者、アドバイザーの存在が不可欠となるわけである。そのためには、苗木生産者、苗木流通に関わる専門業者、コンサルタント、生態学、緑化工学などの研究者、専門家、樹木医などの中から多くの人材を発掘していくことが求められる。

また、緑化工学会、生態学会、環境省生物多様性センター、日本緑化センター、各都道府県の林

業技術センター、日本植木協会、全国山林種苗組合連合会、自然保護協会、森林再生支援センター、自然回復植物協会などの諸組織にこういった樹木特性や地域的自然に関する技術情報の蓄積が図られることも重要ではないかと思われる。

### 6-2. 土木計画者との連携

地域生態系、潜在自然植生を考慮した自然再生に多数の地域性種苗を適用する計画を緑化、生態学の専門家だけが立てたとしても、實際上、この緑化がうまく進捗する可能性はそれほど高くない。

群馬県と長野県にまたがる神流川ダム周辺緑化（対象面積約10ヘクタール以上）のために、東京電力は70種にのぼる地域性苗木を自社生産したが、旧来の平坦面積を最大限に確保し、のり面形状を施工性を第一に考えた旧来の土木造成手法で行うと、多様な樹木の生態的特性に見合う生育基盤は確保することができないと考えられた。

このため、土木造成手法の根本的な見直しによって、斜面方位、勾配、土壌粒径組成、水分環境の複相性を確保するように努めている。もちろん、このような多様な造成基盤をつくってもそれぞれの樹種を安定的に生育させるための、配置、密度、光コントロールなどの知識がなければ、緑化設計は困難なものとなる。

### 6-3. 苗木価格の見直しに係る課題

遺伝的多様性を考慮した地域性苗木を適用しようとする場合、そのコストは前述した通り、かなり高いものにならざるを得ない。一方では、遺伝的観点を無視した安価な苗木が存在し続けるとすれば、実際に地域性苗木が流通するためには、何らかの工夫が必要である。つまり、緑化施工においては、施工業者の利益確保の仕組みが間接経費の確保以外に緑化資材の設計価格と調達価格との差益に基づいており、検収体制が不十分であれば、地域性苗木の設計となっても、実際には地域系統群を無視した、調達価格の安い従来苗

木が用いられる恐れが大きいからである。

こういった情勢の中で、地域性苗木の使用は、工事特記仕様書の中に明示され、かつ材料検収が正確かつ容易でなければ、地域系統群に基づいた自然再生はありえない。例えば、同じコナラでも、朝鮮半島産の遺伝子をもつものが選択され、しかも単株から得られた種子で大量生産された苗木となる可能性がある。

また、種子の得にくい樹種や育成コストがかかるため、苗木価格が高くなる樹種苗木が敬遠される傾向は現状の価格体系においても発生してい

る。

自然再生や地域生態系の復元、生物多様性の高い樹林化といったテーマで緑化を進めようとするときには、こういった価格による制約を受けないシステム、例えば、特記仕様書明記すること以上に、どの樹種をどのような本数組み合わせで、どのような立地に配するかという技術に係る質的向上を緑化計画者に求めなければならない。このため、教育の充実とともに、計画者の技術レベルの検証を定期的に行うことが必要となってくるかもしれない。

## 『シカと森の「今」をたしかめる』

### エクスカーショ&シンポジウム開催報告

「平成 16 年度 独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金」の助成金を受けて、2004 年 11 月 27 日(土)、28 日(日)に奈良県にて、シカの食害による全国の植生変化の現状や多様性保全のための試みを広く市民に知らせ、ありうべき対応策への合意形成の一助となることを目的とし、エクスカーショ&シンポジウムを開催しました。

1 日目は、翌日の講演者にも参加してもらい、みんなで大台ヶ原の現状を見よう！とエクスカーショ&シンポジウムを企画した。

午前 9 時半に JR 奈良駅前をバスと乗用車で出発し、12 時頃に大台ヶ原駐車場に到着。昼食後、10 人前後のグループに分かれ、それぞれのグループに本センター専門委員や翌日の講演者が解説者として付き、防鹿柵が設置してあるブナ林、荒廃の激しい正木ヶ原のトウヒ林と大台ヶ原の現状を 3 時間ほどかけて見学した。



正木ヶ原のトウヒ林



パネルディスカッションのパネラーの皆さま

2 日目は、奈良教育大学の講堂にてシンポジウムを開催した。午前 10 時に村田源理事長の挨拶、松井淳氏の開催趣旨説明に続き、講演がスタート。

「奈良の森で起こっていること」「エゾシカの個体数変動と植生変化 - 30 年間の追跡 - 」「世界遺産屋久島の現状と取り組み」というテーマで 3 つのセッションに分け、奈良、北海道、屋久島での現状や課題を、様々な立場の演者を

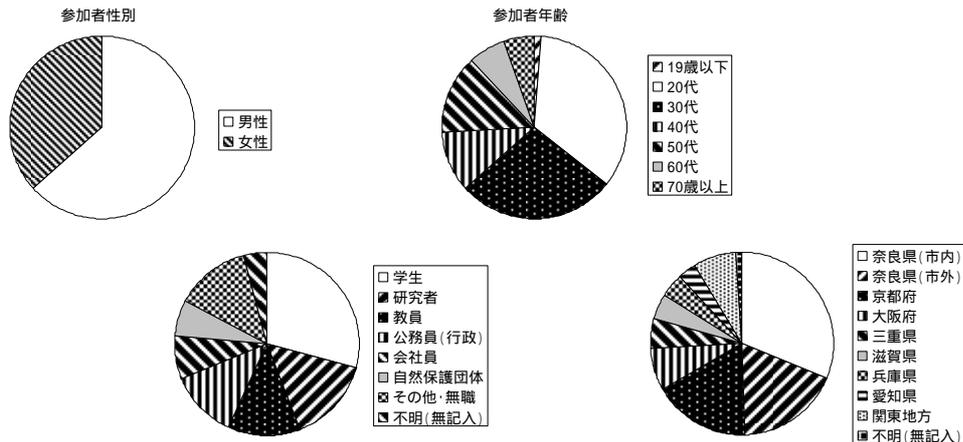
お招きしお話を伺った。講演後はパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションは1時間と短時間であったが、パネリストのみでなく、会場からも活発な発言がみられた。

各講演者の講演内容は要旨集としてまとめ、

当日配布した。本センター会員にも別途配布したので、今回この紙面では省略し、2日目のシンポジウム時に参加者に協力していただいたアンケートの結果を報告したい。

### ～シンポジウムアンケート結果～

【参加者人数】 エクスカーション 83名、シンポジウム 150名、アンケート回答数 93名



### 【感想】

- 内容について -

- ・シカと森の関係がより深くわかった。
- ・いろんな地域の話が聞いたことと会場内からの発言とうまく取り込めていた点良かった。
- ・多岐にわたる視点からの意見が多く、面白く聞くことができた。屋久島の方々の生の声を聞いたのも良かった。
- ・シカが増えることでどうなるか、どうしてシカが増えているかを知ることができた。その対策としては、手法は確立していないけれど様々な考えがあって、それは必ずしもシカをどうするだけでなく、その回りの要因や人を含めての考えをしないと、という点になるほどと思った。これからも研究を進めて生態系のバランスの程よく保てる場所が見つかればと思う。
- ・管理の究極目的が「生態系」のためか、自分のノスタルジーのためか、生計のためか、はっきりしていない、または演者によって異なっている。実際に方策を動かす時にはそれをはっきりさせないと資金繰りの面で行き詰ると思われた。
- ・これだけの内容なのに参加者が少ないことに驚いている。一般参加者の一個人の意見として、内

容的に難しい面(専門的すぎる、知りたいことがちょっとずれている等)もあり、今後、親しみ易く分かり易い内容の工夫も考えればと思う。

- ・森林の衰退の要因の一つとして、シカを取り上げてのシンポジウムだったが、今後、複合的に影響を及ぼしていると考えられる、温暖化や大気汚染の問題などにも(調査されている方もおられるので)取り組んで欲しい。
- ・シカの増加に人工林の拡大、その後の管理放率が大きく関わっているのは間違いないと思うが、林業、人工林管理の面から、そのシカへの影響をもう少し詳しく議論するために造林あるいは森林保護の分野の研究者を一人、演者に加えてもよかったのではないか。
- ・昔、人間の利用で山が荒れていた。そこが餌場になってシカも多かったと思うが、昔はそれほど問題にならなかったのが何故かということに鍵があるかと思っていたが、矢原先生たちのコメントですっきりした。人間による個体数調整がやはりもっと必要だと思う。
- ・優秀な人材は限られているので、個々のケースに個別にアタックしては、日本中で同時進行

する問題に対処できない。国全体で対応戦略を速やかに立てて、その中で大台ヶ原をどのように扱ったらよいか考えたらよいのではないかと。

・大台ヶ原が深刻な状況にあるのはよく理解できたが、保全するためにどれだけの労力と経費をかけてもよいものか理解できなかった。解決すべき問題が多々ある中で、ここを守ることの優先順位をあげるためには、ここの貴重性、希少性を科学的な根拠に基づいて主張できなくてはならないと感じた。

・シカについての様々なアプローチがあり、非常に興味深かった。

・シカと針葉樹と実生と、いろいろなものの関係が講演を聞いてよくわかった。大台ヶ原についてもシカを減らすだけで森林は戻らないということもよくわかった。

・奈良のシカ（大台ヶ原・春日山）については、ある程度の認識はあったが、北海道や屋久島のシカについての講演を聞くのは初めてで、他の地域のシカの現状を聞くと、改めてこのシカの問題はとても深刻で、とても難しい問題だと思った。何故、樹皮剥ぎをするのか、人間にとって有毒な植物も食べてしまうのかなど、分かっていないこともまだまだあるようなので、とても興味深い。

・毒草とは人間について言う言葉であるということを知った。

・シカの害が増えていることは知っていたが、ここまで深刻とは認識していなかったので大変興味深かった。松田先生の「鹿クイズ」のような分かりやすい形での啓発活動を今後広げていく必要があると思った。

・大峰・大台のシカによる食害は大変なもので貴重植物の危険状態にあるのが山を歩けば実感できる。日本各地で同様の問題があることが今日のシンポジウムでよくわかった。

・このような現状の影響や被害の研究や事業がまとめて紹介される機会がもっとあるべきだと思う。

・エクスカージョンで現地を見学することができたので、6~7年前に見た日光のシカ被害と比較しながら考えることができた。シンポジウムでも多くの地域の具体事例があったので、シカ問題の複雑さを再確認することができた。

・シカ問題の原因となるファクターは、人間の関与や文化も含めて地域差があるように思われたので、このようなシンポジウムを通して、様々な地域の研究者が地域差の把握と地域ごとの対処法を研究してくれることを楽しみにしている。

・セッションごとのテーマに沿った話は、それぞれ個性的な意見や客観的な見方を知ることができて興味深く話を聞くことができた。パネルディスカッションでは、会場からの挙手の半数ほどの方が意見を言えなかったのが残念だと思った。パネリストの司会の方はよくまとめて下さっていて、わかりやすかったのですが、時間が足りなかったのかと思う。

・私の研究している昆虫の利用している植物がことごとく、シカに食べられている。例えば、弥山や日光。そこでシカ増加の現況を知りたく参加した。発表を見て、シカの増加の負の影響がよくわかった。エゾシカに適用されている、管理計画を本州のシカにもぜひ適用してもらいたいと思った。シカ肉の流通・換金システムの形成が必須かと思った。

・具体的なデータを基にシカの果たす役割を拝聴することができて良かった。

・森林の変化の要因は、本当に様々なことが絡み合っているのだと改めて実感した。対策を行うには、自然生態系という広い視点が必要だとつくづく思った。

・調査研究も大切なことだと思うが、昔ながら山に住み、自然と共生してきた人々の知恵は学ぶべきところがたくさんあり、グラフやデータよりも素直にうなずけると感じた。

・県内在住ながら、全く知らなかった森の実状に大変ショックを受けた。共に生きる者として何を知らねばならないのか、自然の中での人の有り様を多くの人々に伝え、考えてもらいたいと思った。今後も引き継ぎ、最新のデータと共に、調査研究の成果を知りたいと考えるだけでなく、若い人達や多くの県民にも、実感できるような企画の必要性を感じた。今回のシンポジウムは、まさに待ち望んでいた企画であり、今後も情報の更なる提供をお願いしたい。

・仕事でシカの食害に関わることになったので、

森林の実態、シカの生態を少し勉強したかったので参加した。下層植物の重要性、森林におけるシカの役割等、市民ベースの話が分かりやすかった。森林再生と人の関わりを考えなくてはならない時であると認識した。

・植物・動物・人の共生でバランスが最も大切であるが、主役はあくまでも人ではないかと考える。バランスを考慮しながら主役にとっての最良のリフォームが必要と考える。

・私は生物の専門ではないが、とても楽しく聞くことができた。高校生たちにも展開しても良い内容だったと感じる。高校の授業でも取り上げたいと思う。

・シカについての知識がほとんどない状態で参加させてもらった。ここでシカの適正密度は難しいものだと改めて実感した。森とシカと人間がうまく共存できるようになって欲しい。

・たまたま、このシンポジウムの開催を知り、公務外として参加した。獣害対策の仕事をしており、シカに関わっているが、非常に勉強になった。違う観点からシカを見ることができた。折角なので、近隣府県の公的機関にも案内をして欲しかった。

・私自身は、兵庫北部でブナ林の動態を調べていて、チシマザサがブナ林の更新を妨げている様子を見ている。シカはブナを食べないとのことですが、大変参考になった。

・知らないことが多かったので、シカと森に対する認識が深まりとてもためになった。難しい問題が多いと思うが、自分なりの立場で森の保護、再生に取り組んでいきたいと思う。

・登山者として、山が美しく豊かで快いものであって欲しいと願っている。目指すべき山の姿を追求していきたいと思う。

・ササの減少、絶滅はシカだけが原因のように解説されたが、その他の要因も考慮しなければならないのではないか。大気汚染、気候変動が直接植生に与える影響も実証する必要があると思う。

・近畿地方で近年、行政によって環境をテーマにした公園や宅地開発が進められるようになり、また林業施策の転換もあり、私自身森林管理計画への関わりが増えてきている。獣害駆除という発想から資源の利用へと頭を切り替えようという点は

重要と思う。利用やマーケティングの専門家の話も聞きたかった。

・実際に大台ヶ原を見、壊滅状態の森にショックを受けた。シンポジウムでは知らなかった現状等もいろいろと知れ、とてもためになった。また個人ができることがあれば取り組んでいきたいと思う。

・エゾシカに比べて、ホンシュウシカは頭数の計測は難しい、適当な方法はないのか。農林業被害の算定方法はあいまいな部分が多いのではないかと。

・北海道におけるシカの実態報告はかなり興味深いものだった。2度の禁猟の後、かなりの被害がでているようだった。今後、増加しすぎたシカに対しての対策が課題のようだが、有用環境資源として考えるのは難しいのではないかと。手間と賃金の問題はあると思うが、やはり狩猟による頭数制限が最も良い方法ではないだろうか。

・食害に対する対策方法について、防護柵、有害植物の植樹、失われる植物に対する保護についてあまり話がなかったのが残念。その他、シカ・イノシシが里山の外（農地）を荒らしている現状もふまえ、今後対策等が必要ではないかと。

・一般向けの「森林保全」について考えるシンポジウムとしては、素晴らしいものだったと思う。

・屋久島のシカを狩るなんてとんでもないと思っていた一市民のうちの一人でしたが、考えが変わった。

・シカの問題がこんなに深刻とは思わなかった。これから山や沢に行く時は注意して観察するようにする。一刻も早く答えと実践をして欲しいと思う。

・シンポジウムというよりは学会発表という感もあった。少し内容が難しいところもあった。

・シカと森林の関係がおかしいこと「人」の関わりを無視できないことなど、研究者、行政など関係者間での問題意識が共有化されてきている現状で、ようやく市民との情報や問題意識の共有を進められる場が生まれた気がする。第2弾、および全国統一調査など企画して欲しい。

・大台ヶ原の現状が他のシカ生息地域と類似していることを学んだ。

・大阪ではシカ保護管理関連では農林業被害の話

題しか現場では出てこないが、大台ヶ原や尾瀬ヶ原など奥山だけでなく、身近な里地里山でもこの数年林床植生が激変している。それをどう捉えるか、評価したらよいかのヒントになった。

- 今後について -

- ・研究者の見解が市民的コンセンサスにつながる努力が欲しい。
- ・次回もこのようなテーマで折角だから続けて欲しい。そこではとにかくシカを守りたいという保護派の人も招いて「合意形成」について話を深めるというテーマでやって欲しい。
- ・今後、この問題を解決するための具体的な行動（調査、ササ取り等）に市民が参加できるように情報発信をして頂けると有難い。

- その他 -

- ・昨日大台ヶ原を歩いて、道の整備が様々な形でされていたが、整備されていないところは道が広がりつつあった。丹沢では土止めが階段のようになって非常に歩きにくく、登山者がそれを避けて通り、また道が広がっていつている。自然との景観も考えつつ、オーバーユース対策を早急に行ったほうがよいのでは。自然から見た再生と、人から見た再生、両視点から考える必要がある。歴史・文化など幅を広げて総合的な計画が必要。大台ヶ原は金を使っていると感じた。大台ヶ原はとても美しいと思った。
- ・大峰山系で、細々と芽生えたオオヤマレンゲの実生が、毎年、数を減らしている。消失しないうちに保護の手をと願っている。
- ・シカ害はえさが足りないということで起きている。何でも食べるということなので、樹木の伐採や剪定等で都市ではゴミとして出される枝・葉を森に持ち込んだりして、半餌付けをはいけないのだろうかと思った。被害の大小が分かっているし、ササが増えすぎると困るということを考えて行ったら、経済的にも環境的にもよいのではないかと感じた。ゴミ焼却量も減る。
- ・重要な地域の問題であると同時に日本全体の問題でもある。生態系全体の保全は国土保全と同じことである。治山治水は国の礎である。政府、行

政は腹をすえて取り組む必要がある。

- ・春日山原始林には年間 50 回位通っている、春日山大好き人間。鹿害が気になると共に、小鳥のさえずりも減ってきているのも憂いている。退職し、時間的余裕もあるので、もし春日山の調査や保全のボランティア等があればお手伝いしたいと思っている。
- ・人が造った自然（里山）はずばらしいところ？シカが造った自然は自然ではないのか？でも、私は人間。大台ヶ原も春日山もその回りが問題ではと私は思う。では、どうすれば良いのか？
- ・造林拡大で広葉樹林がスギやヒノキの針葉樹の植樹に変わったことの影響はどのように評価されているのか？

以上

アンケートの内容は肯定的で評価の高い意見が大勢を占めたが、改善、今後の努力を求めるものもあった。いずれも真剣な内容ばかりで、この事業の継続発展の必要性を痛感した。

また今回のシンポジウムはやや準備期間が短かったこともあり、広報不足だったところもある。研究者や関係者、環境団体に所属をしている方のみでなく、関連行政や一般市民にも伝わる広報を考える必要があったと反省をしている。

次回、シンポジウム開催までの課題である。



シカによる樹皮剥ぎ（ウラジロモミ）

\*\*\*\*\*

～ 専門委員 活動報告 ～

## 「川と共に生きる全国会議 in 北上川・展勝地」に参加して

森林再生支援センター理事・専門委員 下村泰史

はじめに

10月9日(土)から11日(月)の3連休、岩手県北上市で開催された、「川と共に生きる全国大会 in 北上川・展勝地」に行ってきました。

これまで展勝地には高田常務理事と国忠専門委員が関わってきており、今回のシンポジウムにもコーディネータ等の役割で参加しています。

このシンポジウムは、「第5回 川での福祉と教育の全国大会」というサブタイトルが与えられています。4年前に北海道帯広市で第1回が開催され、その後シリーズとして広島、茨城、秋田で行われてきたシンポジウムと、現地で何度も行われてきた「北上川水辺フォーラム」が、全国規模の事業として合流したものであるということでした。

北上川が生み出す風物の豊かさとそこでの活動のパワーに打たれました。シンポジウム自体の議論については若干食い足りなさも残りましたが、考えさせられるところの多いものでした。

旅行社からは飛行機のチケットをもらっていたのですが、この週末は台風が近づいてきていて、飛行機が飛ぶかどうか間際まで判りませんでした。結局はなんとかフライト。無事に時間通りの10時半に花巻空港に到着しました。

会場は北上川中流域(岩手県側、下流は宮城県)の公園「展勝地」一帯です。ここは約90年の歴史を持つ、桜並木が自慢の市立の公園ですが、今は公設民営型で株式会社が運営しています。ここが地域おこしと流域連携の一つの核になっているようでした。

到着してみると、やはり雨が続けていたせいか北上川の水面は大きく膨れ上がっていました。

10月9日(土)PM～エクスカージョン「見てみよう会」

本シンポは明日10日午後から。9日から10日の午前中にかけてはこぢんまりとしたエクスカージョン「見てみよう会」に参加しました。天候不順が心配される中、ルートを変更して昼過ぎよりスタート。案内して下さった方々の殆どが「高橋さん」だったのはびっくりしました。なんと北上市民の半分が高橋姓なのだそうです。

国見山からの北上川の景観は圧巻でした。側に都市が展開しているにも関わらず、分厚い河畔林が山にまで繋がっていました。増水していたために余計に林と水が近く感じたということもあるかもしれませんが、構造物が変な具合に介在しない、生きている川の風景という印象を受けました。

その他一遍上人の祖父にあたる武士河野通信の墓「聖塚」や、縄文期の竪穴式住居が群で復元されている「樺山古墳」、かつての渡し場の跡などを見学し、地域の歴史についていろいろ考えさせられました。

夕食時には、地元の手作りのごちそうとお酒をたっぷりいただきました(僕は飲めないのでお酒は匂いだけいただきました)。おいしくて感激です。

歓談しながら活動紹介のビデオを拝見しましたが、流域連携団体が復元した「平成のひらた(舟偏に帯旁)」航行の記録には圧倒されました。「ひらた舟」は江戸時代に使われていた100石級の和船で、北上川行き来し海にまで出ていたそうです。この巨大和船を復元する技術がまだ流域にあるということと、それを実際に復元してしまう市民のパワーは驚きです。

次いで地元の伝統芸能「鬼剣舞(おにけんば

い)」の実演がありました。色とりどりの鬼の面をかぶり異様な扮装をした男たちが舞い踊るのですが、これがまた凄い。激しい中にもリズムの緩急が実に巧妙にコントロールされていて、決めフレーズでピシッと型が決まるときの快感は堪りません。一言では言えませんが、仮面舞踊の超自然性みたいなものがびんびんと伝わってきました。インドネシアのパロンダンスなどが有名ですが、そういうのに匹敵する、国際的級のダンスだと思いました。こういう凄い芸能を伝えている団体が村毎にあるのだそうです。その厚みに圧倒されます。

10月10日(日)AM~エクスカージョン「見てみよう会」続き

昨日に引き続き、地域文化を探るツアーです。古くから栄え、いろいろな時代のいろいろな事跡に事欠かない場所ですが、この地の歴史に最も濃い影を落としているのは、8~9世紀の蝦夷と大和の抗争の記憶のようでした。毘沙門堂に残る楠材の一木造の毘沙門天立像は、大和による侵攻当時のもの、脇侍の二天(増長天と多聞天だったか...)はその100年後に地元産材をもって寄木造で造られたものとか。アテルイの碑が清水寺にあたりして、田村麻呂の奥州征伐の物語は京都とも縁の深いものです。今回のシンポとは直接関係ありませんが、前九年の役で討たれた安部貞任絡みの伝説が桂川流域の宇津峡(京北町)にあたりということもあり、自分が関わっている流域と、この遠く離れた東北の地との関わりについていろいろ考えさせられました。

その後、展勝地の一角を占める「みちのく民俗村」へ。周辺の古民家が地形を活かした敷地内に多く移築され、一つの村の姿を創っていました。この地域の民家にはもともと「ナガシ」はなかったとか。川から汲んできた水を丁寧に丁寧に使ったのだそうです。

この村の中心にある芝居小屋「演舞場」が、今度のシンポジウムのメイン会場となりました。

10月10日(日)PM~基調講演「よみがえれ舟運 よみがえれ地域経済」

10日は午後から本シンポの開始です。北上市長、整備局河川課長、振興局長といった方々からの歓迎挨拶がありました。後藤運営委員長の挨拶のなかで、この北上川が廃鉱から流出する鉱毒によって死の川になったこと、今は技術的な措置によってなんとか水質をたもっているが対症療法にすぎないことなどが触れられ、流域の深刻な課題の一端を垣間見たような気がしました。

挨拶に続き、第3回世界水フォーラム事務局長を務められ、現在日本水フォーラム準備室長の尾田栄章さんから「よみがえれ舟運、よみがえれ地域経済」と題された講演がありました。

尾田さんが若い頃建設省の職員として北上川流域に赴任されたことは、鉱毒問題が深刻だったそうで、今も実は危ない状態なのだということ、同時にそうした危なさはどの川も持っているのだということでした。また、舟運は水への視点を180度変更してくれる、ということで、さまざまな事例が紹介されました。

水辺空間を活かしている事例として、パリのセーヌ川(沿川自動車専用道路の季節限定ビーチ化。交流の場としての活用)、韓国の清溪(チヨンゲジョン)川(高速道路を撤去しての河川復元。来年には完成)、北京の菖蒲川(オリンピックに向けて河川復元)などが紹介されました。日本では東京オリンピックに向けて慌てて川に蓋をしましたが、40年たって世界的に水辺への認識が変わってきているとのことでした。

次いで本論である舟運の話に入りました。日本では物流、人の輸送としての舟運は完全に捨て去ってしまったので、観光・レジャー及び緊急時の利用がメジャーな論点になるだろうということで、イギリスの産業革命時に燃料輸送の為に造られその後放置されていた水路をレジャーに活用しているナローボートの事例、長良川の国際レガッタコースを活かした地域振興の例、導水路ルートを見直すことで水質を改善し、年30万人が利用するようになった松江堀川遊覧船の例などが紹介されました。

水を巡る世界の情勢として、「1日20リットル手に入らない、または30分以内に水が手に入らない(=安全な水を手に入れない)人が11億人。衛生的なトイレが使えない人が24億人いる。2005年には70億人が水不足に。現在の自然災害死者の90%が洪水土砂災害。2050年には今の2倍の20億人が被害を被りやすくなる」といったことが紹介され、そのための取り組みの必要性を強調されていました。舟から水を見ることはそうした水への視点の変更を促してくれる、とまとめられました。

私たちの桂川を含む淀川流域では、河川管理者側の「基礎原案」に対し淀川水系流域委員会が提出した「意見書」のなかで、「大規模災害発生により陸上交通が途絶したとき、緊急物資の輸送などに舟運は有効であるが、航路確保・維持のための河床掘削や水制工設置などの大規模改修は河川環境への影響が懸念される。このため、舟運復活に関しては河川環境への影響を踏まえ、総合的かつ慎重な検討が必要である。すでに「淀川舟運研究会」、「淀川大堰開門検討委員会」が設立され検討が行われているが、より徹底した情報公開、「淀川環境委員会」との情報交換、環境保全に関わる学識経験者、住民・住民団体の参加による総合的な検討を行う必要がある」とされています。舟運のネガティブな側面についても考える必要はあるのでしょうか。しかし、「ひらた舟」の実践等を見ると、川を行き交うことによる連携・交流の可能性の大きさを強く感じるのも確かなのでした。

10月10日(日)PM~パネルディスカッション「川・流域・地域再生」

その後休みを挟み、パネルディスカッションが始まりました。コーディネータは全国水環境交流会の山道省三さん。パネラーは国土交通省、文部科学省宮崎さん、厚生労働省高木さん、環境省佐藤さん、経済産業省久野さんなど各省から課長代理クラスの元気な人たち、あと河北新報の鈴木さん、青山公立大学佐々木先生という顔ぶれでした。

まず、河川環境、流域環境づくりをめぐる官

民連携についての行政レベルでのトピックの紹介が各省からありました。省庁間の縦割りの現状とそれを超える連携についても話題提供がありました。パネラー側に活動団体がいなかったこともあり、実践側からの議論はあまりなく、またもっとも関わりの深い地元自治体の声が聞けなかったのは少々残念でした。

会場からは、「NPOサイドが技術や専門的知識が必要なときどうしたらよいか」「業者扱い等、行政の対NPOつきあいの姿勢に問題はないか」「近年の市民参加の議論は、動員色が強くなってきてはいないか」というような質疑が提出され、率直な議論が行われました。各省庁の方もかなりフランクに話されていていい感じでした。

10月10日夕方~交流会「展勝地夜会」

この晩は企画側参加者全員参加の交流会「展勝地夜会」が開催されました。会場の展勝地レストハウスからの北上川の風景は素晴らしいものでした。ちょうど川の向こうに日が落ちた頃、宴が始まりました。

座が暖まった頃、鹿踊が紹介されました。北上市の中を旧南部藩と旧仙台藩の境界が通っているそうなのですが、藩政時代にはこの越すに越されぬ境を巡ってさまざまな出来事があったようです。この境付近に伝統芸能の伝承地が多く分布しているとのことでしたが、この鹿踊もその越えられない境を挟んでの微妙な影響関係の中で生まれたものなのだそうです。次いで昨日とは別の集落、二子の鬼剣舞が披露されました。集落によってリズム感が異なり、別の個性が生まれているのが面白く思われました。

展勝地の軽石さんは、ものすごいアイデアとネットワークとパワーの持ち主のようでした。四国、東京、横浜、北海道等、全国から流域連携の活動をされている人が集まっていました。こういう場を通じて新たなネットワークが広がっていくのでしょうか。

10月11日(月)AM~分科会

11日の午前中は4時間かけての分科会でした。第2分科会は「川と共に...実践交流」ということで、さまざまな活動の報告が行われたようです。

私が参加したのは、第1分科会「共に生きる流域圏をめざして」の第1会場「水辺」でした。場所は引き続き民俗村演舞場です。第1会場コーディネータは岩手日日新聞の千葉平さん、教育委員会中央生涯教育センターの千葉周秋さんでした。別に千葉姓が多い訳ではないそうです。第1分科会の全体コーディネータとして全国水環境交流会の山道さん、青森公立大学の佐々木先生も第1会場に陣取られました。

第1分科会は3ヶ所に分かれて3元中継で行うという試みでしたが、うまくいったかどうか。第2会場は男山の頂上、森の中でのディスカッションとなりました。テーマは「里山」。コーディネータは本センターの高田研一常務理事、藤代町教育委員会の塚本さんでした。第3会場は「ひらた舟」の船上（うらやましい！）でテーマは「川舟・流域」でした。コーディネータは辺見清二さん、河北新報の鈴木素雄さんのお二方。

佐々木先生の発案により、「地域の原風景から学ぶ（だと思えます）」、「トータルとしての自然・川・くらし（だったかな?）」、「より具体的なアクションプランの提案」といったテーマが設定され、各单元ごとに各会場間で中継・報告、というスタイルで進めることになりました。

以下、第1分科会第1会場の感想です。

「そもそも原風景って?」とか「トータルとしての、と言われても」というのもやはりあって、なかなか流域でのなりわい・くらしと環境の具体的な関わりは見えてきませんでした。その中のひとつひとつのディテイルをなるほど、と共有する中でこそ、地域環境と生の一体性、全体性のようなものが見えて来、共感的に伝わっていくのだと思うのですが、なかなかそこまでの地元からの語りは出てきませんでした。いきなり一般論的なテーマでくくるプログラムにもやや問題があったかな、という気もしまし

た。

それでも会場からぼつぼつと出てくる意見のなかに、流域での暮らしぶりを伺うことができました。昔からよく溢れ、水害の常襲地としての記憶が未だに根強く残っていること、北上市の町場育ちの人にとっては必ずしも北上川や展勝地が身近な存在ではなかったことなど、興味深く伺いました。

最後はアクションプランということで、展勝地の軽石さんが夢に描いている、「屋根のない大学構想」に、地域資源を結びつけていく案について議論しました。

「若い人の参加を促す仕掛けが必要。参加費にも奨学金枠があったり、学校の授業時間と互換できる仕掛けなど」（佐々木先生）

「舟運、和船を活かしたい」（千葉平さん）

「屋根のない大学にはコストがかかるが、産業基盤をどう充実させるかがセット。環境資源に優れたものがあり、この立地はそれを可能にするだけのポテンシャルを持っている。また「がいあ市」など個性ある市としての魅力も。その収益を基礎にしていくことができるだろう。この大学で得られた地域価値を、また資源として地域で活かしていく相互的な連関が理想」（高田さん）

「私の孫が4、5年まえ、4歳の時、珊瑚橋に白鳥が沢山きているところに連れて行った。その子が今10歳を過ぎているが、白鳥のまねをして家のなかを走り回っている。忘れられない経験となったようだ。白鳥をきっかけに生き物への共感を育てたい」（山崎さん：童話作家）

「この地域の良いところ悪いところ、どれだけ発見して伝えられるか。フィールドワークを中心とした長期的なカリキュラムづくりが必要。大学生だけでなく子どもから大人まで。事前勉強会でのヘリコプターで空中から姿を見た経験はよかったので目玉にしてほしい」（山道）  
といった意見が出ていました。

分科会全体の感想としては、「大都市圏域との関わり」「都市の市民との意識のズレ」というような話題がほとんど出なかったことが、変な感想かも知れませんが新鮮に思われました。

それなりに自立した地域が繋がっていくイメージ。これは実は幸福なことなのかも知れないという気もしました。

10月11日(月)PM~閉会集会「記念講演」

「川での福祉と教育の全国大会」ということで、最後は福祉の世界から、日本社会事業大学学長の京極高宣先生のお話でした。

「共生とは、「自然と人」「人と人」の二重の意味があると思う。この2つは深いところで一致していると思う。環境福祉学という新しい分野があるが、まさに川と福祉の大会にふさわしい言葉だろう。福祉関係社はややもすれば、環境問題は別だと考えがち。視野を広げる必要があると思う。また環境問題に関わってきた人も、自然科学的なアプローチだけでなく人との関わりがクローズアップされてくるなかで福祉に接近。「学融合」的アプローチが求められるだろう」

「人間の共存を考えると、障害の有無にかかわらず共存することに意味がある。3障害:精神、知的、身体(+発達障害など)。支援費制度と介護保険の統合問題についてはいろいろな論点が。障害者については就労支援など、介護以外のサービスが必要。簡単に統合できない。グランドデザインが示されてこなかった(3障害縦割り)。尾辻大臣になって5日の閣議の後の記者会見で障害者施策の統合が示唆された。詳細は明日発表されるはず。授産等の障害を超えた統合、障害の個別性に対応するケアマネジメントの障害を超えた体制づくりなど。グランドデザインについては、戦後最大の画期的な改革となると思う。障害全体の中で共通の部分は共通対応、個別性にも肌理細かく対応でき、良いと思う」

「これから共生、自立という言葉がキーワードになっていく。自立は自助とは違う。自助 self help は手段。互助、公助もそう。自立は目標。自助、互助、公助を組み合わせると自立を実現していくことが大事。リハビリテーション医学のなかでも自立と共生が基本理念になってきている。

「モンゴル人は都市化されても、年に一度は砂漠でパオを張って暮らし、自分たちのありようを再確認するという。日本でも川に代表される自然と生活のなかで関わるのが大事だろう。本当の福祉のこころ、慈悲のこころを考えるうえで、川のイベントとの関わりは私にも大きなショックを与えている」

「自然系と社会系の統合が大事だと思う。これからの大学での福祉教育にもこうした視点を活かしていきたい」

といったお話がありました。

10月11日(月)PM~閉会集会「『北上川・展勝地』宣言」

最後に展勝地の代表、軽石昇さんより、「『北上川・展勝地』宣言」が提案され、全会一致で採択されました。以下がその内容です。

#### 「北上川・展勝地」宣言提案

私たちが本大会を開催するに当たり、皆様を展勝地にお招きした理由は、その歴史の中にあります。

展勝地はこの北上に住む人たちと共に80有余年、様々な分野の人たちの弛まない協力・協働のもとに今日の姿があります。

展勝地・北上川流域の将来を考えるに当たり、先人の智慧を習い、私たちも全国の多くの人たちの智慧を借り、実践していくことが北上川の未来を描く大きな力となります。

その趣旨を理解していただく為、私たちは事前学習として3つのプログラムを行い、大会に備えてきました。

川での福祉と教育についての全国大会はこれまで4回の大会での議論を重ねてきました。

私達が大大会のテーマを「川と共に生きる全国大会 in 北上川・展勝地」にしたのは川が暮らしと命のつながりを教えてくれる貴重な場であり、日々新たな発見や問題を構築していくことが迫られるエリアであるとの認識を持ったからです。

さらに福祉と教育の課題を議論すればする程、地

域や職種をこえたものになることを実感したから  
でもあります。

この大会の集約点は、

- 一、川と向き合う活動を縦横に結びある事。
- 一、流域民と行政・企業の協働を更に進める事
- 一、川を基軸とした地域づくりをトータルな活動に高めるための具体的な提案を進める事と整理  
できます。

私たち自身と未来を担う子供たちの為に、この集約を柱とする活動を参加者が全国で更に推し進める事を決意し、

以上、「北上川・展勝地」からの宣言と致します。

2004年10月11日

川と共に生きる全国大会 in 北上川・展勝地

最後に、来年の開催地として、四万十川流域の中村市が決定したというアナウンスがあり、閉幕しました。

本プログラム2日間、「見てみよう会」を入れれば3日間、それ以前から何度も事前勉強会も行ってきたりとか。大変な仕事だったと思います。

舟運と陸上交通の結節点に位置する北上市、そのもてなしの文化を存分に味あわせていただきました。

実行委員会の皆さん、どうもありがとうございました。

\*\*\*\*\*

## センター事務局よりお知らせ

### ～最近の森林再生支援センターの活動～

フィールドソサイエティー主催「森づくり作業」に講師派遣

法然院（京都市）の裏山で行っている森づくりに講師として参加しています。この事業の成果は、2004年11月にフィールドソサイエティーさんが「観察の森づくり報告書」としてまとめられました。この報告書は事務局にもありますので、興味のある方はご連絡ください。



森づくり作業風景

「大原野森林公園バイオマス事業化検討委員会」開催

第2回 2004年11月25日（木）

於：ひと・まち交流館 京都

第3回 2005年2月15日（火）

於：キャンパスプラザ京都

近畿経済産業省の補助金を受け、大原野森林公園（京都）に小型ガス化ボイラーを導入してのバイオマス事業化の可能性をさぐる調査を行い、それに関する委員会も開催しました。この調査結果は、3月末に近畿経済産業省に報告書を作成し提出しました。

「平成16年度京都府林業者のつどい」に参加

2005年1月27日（木）に府内の林業研究グループ、青年林業士、指導林家等地域リーダーが一堂に会し、日頃の林業諸活動の成果や体験等を互いに交流し、林業の一層の発展を図ることを目的に開催された「京都府林業者のつどい」（主催：京都府）に本センター専門委員2名が参加しました。

ホームページをリニューアル

サーバーが故障し、しばらくホームページが見られない状態が続いてご迷惑をお掛けしています。サーバーを変更し、近々、ホームページを公開できるようになりました。

同時にホームページをリニューアルしています。5月中旬に公開できるように準備を進めていますので、是非、新しいホームページもご覧ください。

#### ～NPO 法人 森林再生支援センター 九州事務所(仮称)設立～

先の総会で決まりました、九州事務所設立に伴う定款変更について認証され、法務局への登記も終了しました。

これにより、本センターの管轄は京都府より内閣府となります。

まだ九州事務所には専従職員がいませんので、当面は京都の事務局で対応をいたします。

#### ～NPO 法人 森林再生支援センター 連絡先変更～

本センターも活動を始めて5年目になり、業務や報告書、書類などの荷物が増えたこともあり、現事務所より歩いて15秒ほどのところに新事務所を借りることとなりました。ワンルームのアパートではありますが、本センターで作成した報告書などを気軽に閲覧していただ

るような場所にしたいと考えています。

お近くにお越しの際は是非、お寄りください。新事務所の住所や電話・FAX番号は下記となりますが、新事務所として登記変更をするには定款変更が必要となりますので、登記の住所は現事務所の住所となります。

#### 【新事務所 連絡先】

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 29 番地  
シティーハイツ上村 106 号  
TEL/FAX 075-432-0026

#### ～開催予告とお願い～

来年度の定時総会を2005年7月23日(土)に開催する予定です(於:京大会館(京都市))。

午前中に総会を行い、午後から「地域遺伝子資源に配慮した-地域性種苗の諸問題」をテーマにシンポジウムを開催し、官・民・学のそれぞれの立場の方々より、地域性種苗についての現状をお話していただく予定です。

遠方にお住まいの方も多数いらっしゃると思いますが、是非ご参加ください。

詳細につきましては後日ご連絡させていただきますが、お知り合いに興味のある方などいらっしゃいましたら、ご案内をお願い致します。

数多くの皆様のご参加を募りたいと考えています。ご協力の程よろしく願いいたします。

センター活動へのお問い合わせ、ご意見・ご提案、センター入会申し込みは下記まで

特定非営利活動法人 森林再生支援センター事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 29 番地 シティーハイツ上村 106 号

TEL/FAX: 075-432-0026

E-mail: info@crrn.net

URL: http://www.crrn.net